

特集 紡いでいく—

神楽 そのとき、人は鬼になり、姫になり、神になる

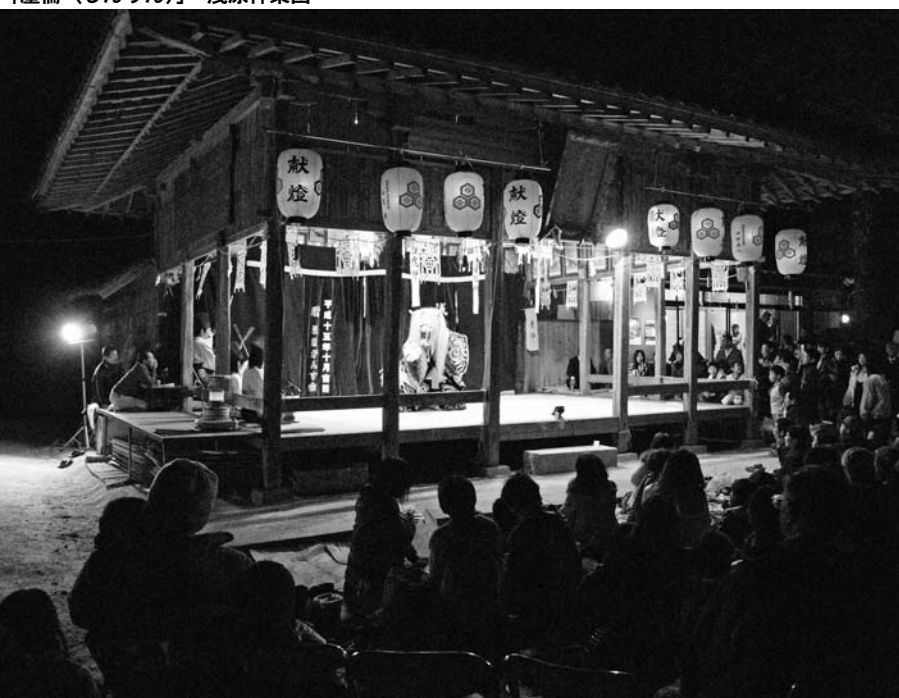
「神楽の伝承は、地域なくしては成り立ちません」。浅原神楽団の副団長久保哲平さんはそう語る。浅原神楽団では、毎月1回地域を清掃するほか、敬老会などの無料公演など「地域完全密着型神楽団」を目指し、活動の指針を打ち出している。「神楽が見たいが、夜はなかなか出られない」という人のために、昼の公演である「ふるさと神楽公演」を6月に行うなど、地域の要望を満たした活動を続けている。

65歳以上の一人暮らしの方を戸別訪問し、話を聞く「ヒアリング」と呼ばれる活動もその一つ。神楽団として、地域の方々の求めることを吸収し、それを生かしていくこうとする活動だ。「もちろん初対面の方がほとんどですが、『どこそこの家の孫です』と伝えれば、『まあ大きいな』と受け入れてくれる方が多い。『ちよつとしたことですが、



写真1 右から、久保哲平さん、坂田雅也さん、沖野明彦さん。3人の提案から、「地域完全密着型神楽団」を目指す活動を展開している。写真2 敬老会に参加するお年寄りの送迎をする浅原神楽団の団員。これも「地域完全密着型神楽団」を目指した活動の一つ。写真3 9月9日に浅原市民センターで行われた敬老会。多くの参加者が神楽を楽しんだ。演目「恵比寿」。

山の中にこだまする太鼓や笛の音に誘われて、たくさんの人が集まる浅原亀山神社での奉納神楽。弾き飛ばすような楽の響きと掛け声、そして鳴りやまない拍手は、未明まで続く。「塵倫（じんりん）」—浅原神楽団—



神楽の存在は、地域なくしてはありえない—

神楽の未来を探る 1 浅原神楽団—

「神楽が見たいが、夜はなかなか出られない」という人のために、昼の公演である「ふるさと神楽公演」を6月に行うなど、地域の要望を満たした活動を続けている。

神楽衣装の補修でつながっています—

神楽の舞は激しいため、その衣装は痛みやすい。めだかの会の土野久美子さんはある日、神楽団からその衣装の補修を依頼された。めだかの会は、手芸教室も行っている女性のサークルだ。「金糸や銀糸の補修は無理ですが、ほころんだところなら直せます。わたしたちにもできることで協力したい」と、土野さんは喜んで引き受けたという。「自分たちが直した衣装で舞う姿を見るのは楽しいですね。直したところが目立たないか、ほかにほつれているところがないか、それからは、神楽を見る目が違ってきました」と笑って話す土野さん。地域と神楽団のつながりが、そこにもあった。



河津原八幡神社秋まつりでの「渡御式（とぎょしき）」の様子。神社で神事を終えたあと、お神楽が奉納される。そして、渡御行列が笛や太鼓の優雅な音色を響かせながら、ゆっくり大歳神社へと向かう。昭和41年撮影。写真提供—上杉直實さん（河津原）。

思い起せば—

神楽はいつも、「ふるさと」と共にあった—。「神楽が見たいから、まつりには帰ってくるよ」郷土を離れて暮らしている人も、地元の神楽を楽しみにしています。神楽が、その地で永く受け継がれてきたのは、人々の日々の暮らしのすぐそばに存在していたから—。



写真1 「助けて—」。友和保育所の節分に、神楽の「鬼」が登場。昭和58年2月撮影。写真2 「気を付けて運転してくださいね」。交通安全運動で「鬼」が啓発に一役買います。昭和59年9月撮影。写真3 友和幼稚園の節分に登場した「鬼」に園児たちは大喜び。昭和61年2月撮影。写真4 友和小学校で行われた第22回神楽舞共演大会。旧佐伯町内神楽団共演による「大蛇（おろち）」。昭和58年11月撮影。

